



令和3年7月、市内在住の宮城幸子さん、那覇市出身で東京都在住の志田房子さんが、国指定重要無形文化財「琉球舞踊立方」の各個認定保持者、いわゆる人間国宝に認定されました。琉球舞踊初、また、沖縄県の芸能分野では女性初の認定です。

先達からの厳しい教えを長年にわたって習得・体現し、琉球舞踊界をリードしてきたお二人にお話を聞きました。

(取材／秘書広報課 ☎862-9942)

宮城幸子さん

琉球舞踊 真踊流相談役
佳幸の会 会長



撮影・提供：大城洋平

憧れだった琉球舞踊

私の出身地である名護市羽地には、戦後多くの芸能家が集まり、村芝居や組踊・舞踊が盛んにおこなわれていました。中学校の卒業記念で「松竹梅鶴亀」という曲の梅役を踊ったのがきっかけで、元々憧れていた琉球舞踊への思いが募りました。「踊りが好きなら那覇に行つた方がよい」との知人の言葉を受け、中学卒業後に那覇に出してきました。そこで紹介していただいたのが、真踊流の真境名佳子家元です。安里の琉映本館で家元が踊る「かせかけ」を見て、すばらしい踊りに感動して入門しました。

忘れられない初グランプリ

21歳の時(昭和29年)、沖縄タイムス社主催新人芸能祭に初めて挑戦し、ベストテン(10人)に選ばれました。当時はお金も物もない時代だったので、小道具を集めるのに苦労しました。本来は前花と呼ばれる櫓の髪飾りを付けるのですが、それが無かったので、家元からヤマト風のかん

ざしを借りたのを覚えています。

また、昭和38年に挑戦した沖縄タイムス社主催芸能祭では、突然、審査員から課題曲の歌詞の意味を問われたり、小さい手鏡しか無いが自分で髪を結ったりなど、とても厳しい審査でした。だからこそグランプリをいただけて嬉しかったですね。

全てを教えてくれた家元

家元は厳しい人でしたから、稽古ではたくさん泣きましたよ。稽古場で泣くと叱られるので家に帰ってから(笑)でも厳しいだけではなく、普段から身だしなみや礼儀作法などを厳しく指導していただき、琉球舞踊は踊るだけでなく日頃の立ち居振る舞いが大切だということを教えていただきました。

70年間琉舞をやってきて、お稽古が苦しいと思ったことはありません。でも、16年前に家元が亡くなった時は、今後の真踊流をどうしていけば良いのかという不安と、師匠を失った深い悲しみ、辛い思いがありました。真踊流一丸となって、家元の技を絶えさせてはいけないという気持ちで今日までやってきました。

家元といただいた各個認定

各個認定(人間国宝)の知らせを聞いたときは、「私でいいんですか?」と受けて良いのかとても悩みました。しかし「私が認められるということは佳子家元が認められること」と思い、家元と緒にいただいたという感謝の気持ちになりました。

1月、各個認定の記念公演を予定しています。第二次保持者の同期の仲間や他流派賛助出演者のみなさん、真踊流の弟子たちと共に、この公演を通して師への報告ができることを嬉しく思います。

人間国宝のその先を見据えて

舞台前は今でも毎回緊張しますね。舞台袖では、「十分練習してきたからあとは歌三線の音をよく聞くだけ」という言葉を心の中で唱えて本番に挑みます。ここ数年でようやく、雑念を払い、無の気持ちで舞台上立つことができるようになってきたところです。終わつた後は、「今日も無事に終わりました。ありがとうございませ」と、毎回祈っています。

家元から学んだ踊りの技や技能を、少しでも後輩たちに伝えるべく、日々稽古を続けています。家元の口癖だった「りくつやあらんど、どうてーさーにうびーる」(琉舞は理屈じゃなくて体で覚えるものだよ)に加え、私自身が体得した技と舞踊の精神を、真踊流の後輩たちや、さらに流派を越えて次の世代に伝えていきたいと思っています。



志田房子さん

琉球舞踊 重踊流 宗家



琉球舞踊における「歩み」

私は昭和12年の夏、那覇市上之蔵町に生まれました。疎開のため、小学校低学年の頃に那覇を離れることになりましたが、波上祭のにぎわいや上ノ山小学校(旧那覇尋常小学校)に通った思い出など、幼心にも戦前の那覇の記憶がしっかりと残っています。私の舞の道への第1歩は3歳の頃です。芸事の好きな母に手をとられ、琉球芸能の名匠玉城盛重師のもとへ入門しました。盛重師のお稽古は、毎日、歩み(基礎的かつ最も重要な歩行技術)のことばかり教わるので、子供心にはどうしても飽きてしまうのです。歩み続けて、やっと扇子を持たせていただいた日の嬉しさは、今でも覚えています。

後に私が東京に出て、能楽堂の橋掛りを歩んだときに、「歩みこそが踊りだ」と盛重師の教えを実感しました。言いかえますと、作品に対する思い入れが、歩みの道々で形成されていくような気がします。悲しいことに、盛重師とは沖縄戦によりお別れをする事になりましたが、幼い私の心と身体に、立派な無形の文化を残してくださったと感謝しています。

尊敬する多くの師からの教え

終戦間もない昭和22年、9歳の頃、沖縄民政府主催の芸能審査会



撮影：神田佳明 提供：琉球舞踊 重踊流

にて、雑踊り「むんじゆる」を舞い、資格証明書を取得しました。この時から、舞踊家としてプロへの道を歩み始めました。戦争で多くを失った中で、のくらは、辛く厳しいものでしたが、琉球舞踊へ対する想いはひとたりとも絶えることはありませんでした。おかげさまで、本年度芸歴82年を迎えます。戦後は宮廷料理の研究家でも知られ、王朝期の宮廷芸能の立方であった嵩原親雲上の流れを汲む田島清郷師や、大正・昭和期にかけて沖縄演劇界の第1線で活躍された仲井真盛良師などで、数々の名匠からそれぞれの得意とする技芸を習いました。現在、琉球舞踊重踊流の宗家として、東京と沖縄を拠点に活動していますが、流儀名の「重踊」には、琉球芸能の先達の方々への感謝と、踊り重ねたいとの想いをあらわしています。

後進への思い

この認定を初心の1歩として、心穏やかに踊れる日のために、今日の日も歩みつづけたいの気持ちです。また、今後の琉球舞踊界にどんな未来が待っているのかと胸を膨らませています。

今回の認定が、芸能に携わるすべての若い方々にとって、辛く迷った時でも「続けてゆけば道が開ける」と思えるような、一つの道標になればと思います。

積み重ねる踊りの喜び

舞踊と向き合う上で、日々試行錯誤することもあります。ありますが、そのまます受け入れ、それを喜びに変える努力を心がけています。また、80余年の舞踊人生での喜びは、折々にございます。昭和28年、戦後初めての本土公演となった文部省芸術祭参加「琉球國劇公演」や、